

「国際規格のFD戦略」海外派遣研修 報告書
米国における学部および大学院の研究・論文指導の動向調査

大学院人間文化創成科学研究科人間科学系 大森美香

【研修先】

Northeastern University
Harvard University, Boston Children's Hospital
Harvard University, Massachusetts General Hospital
Yale University

【研修期間】

2012年11月4日～11月16日

【研修内容】

本研修は、米国の大学院における論文・研究指導の最近の動向について、周辺領域および大学外機関（教育、医療など）との共同研究および大学院生の関わりに着目しながら調査することを目的とした。Northeastern UniversityのDebra Franko教授およびYale UniversityのPeter Salovey教授とは、それぞれ共同して研究を行った実績がある。心理学（臨床心理学、健康心理学）領域の研究指導の実際の視察として、大学院授業やラボミーティングおよび研究指導の参観、大学院生や博士研究員を対象としたヒアリングを行った。

Northeastern University, Bouvé College of Health Sciences

Harvard University, Boston Children's Hospital

Harvard University, Massachusetts General Hospital

Northeastern Universityは、マサチューセッツ州ボストンの中心部に位置する1898年設立の私立大学である。今回の研修先として、Bouvé College of Health SciencesのなかのDepartment of Counseling and Applied Educational Psychologyの研究室を訪問した。

今回の受け入れ研究者のDebra Franko教授は、健康心理学および臨床心理学を専門とされており、摂食障害および食行動の問題については第一人者として生産性が非常に高い研究者である。今回は、その研究室のミーティング、博士論文中間ヒアリングに参加した。

さらに、Franko教授が共同研究者として関係しているHarvard University Boston Children's Hospitalの訪問、Harvard University Massachusetts General Hospital (MGH)

における研究打ち合わせに参加した。ボストンには、ハーバードやMITなど世界的に著名な大学が多く、附属の研究・教育・医療機関も多数所在しており、機関を超えた連携や共同研究には最適な場所である。MGHの打ち合わせでは、投稿した論文の査読コメントが戻ってきたことをうけ、どのように対応するかの討論が行われていた。精神科医の研究室長1名が臨床心理学の研究者3名が、外部の研究者と電話会議を行うという形式であった。学部を卒業したばかりのリーチアシスタント2名も参加していたが、他の研究者顔負けのコメントで討論に参加していた。

Yale University, Department of Psychology The Health, Emotion, and Behavior Laboratory

コネチカット州ニューヘイブンに位置するYale Universityは、1701年設立された米国で3番目に古い大学である。Yale Universityの受け入れ研究者Peter Salovey教授は、米国心理学の第一人者でありYaleのProvostである。Salovey教授が率いるHealth, Emotion, and Behavior Laboratoryは、感情知能および健康心理学の理論的研究および実世界への応用を広く行っている研究室である。これらの研究に携わる博士研究員4名およびSalovey教授との懇談を行った。

Yale Universityの心理学のPh.Dプログラムは（日本の前期課程も含む）、全米のなかでも狭き門であり、2012年度は、723名の応募者に対し最終的に入学した人数は14名である。2002-2003年度から2011-12年度までPh. Dを授与された人数は138名、在籍者の85%が学位を取得しているとのことである。学位取得までの平均年数は5.3年、卒業後の内訳は、大学教員15%、博士研究員39%、アカデミア以外8%、その他39%となっている（2012年調べ）。Yaleの心理学のPh. D. プログラムの特徴は、コースワークの要件が他の北米の大学に比べても非常に少ないということであろう。一方で、博士取得までの要件として、1年目にresearch paper、2年目にpre-dissertation proposalとpre-dissertation paper、3年目にdissertation prospectusの提出が求められている。多くの学生は、学費と生活費をカバーするアシスタントシップを持ち、進行中の研究プロジェクトに参加して業績を積みながら、自らの研究スキルを高めるとともに、研究ネットワークを構築しているようであった。

【まとめ】

研修をとおして、米国のPh. D. プログラムに在籍する大学院生が、進行中の研究の遂行やマネジメントの担い手として、自覚をもってコミットしている姿が印象的であった。学生の資質や教員の指導という要因もあるだろうが、外側の要因として、学位についての社会の認知、学位取得後の多様なキャリアパス、大学院トレーニングを支えるアシスタントシップ（教員が獲得するグラントがカバーするアシスタントシップも多い）も関連しているものと感じられた。